

ハチデヨウグワに於ける本菌に就いては宿主が八丈島より移植され栽培されているものであるが、毎年非常に発生を見る。恐らく移植された後感染したものではないかと考えられる。

(10) *Phyllactinia Fraxinii* (DC.) Homma l. c.: 409-11, 1937.

Hab. On *Alnus Sieboldiana*, The Miura peninsula, Oct. 18, 1952; Yugawara, Nov. 5, 1955; Izu, Itô, Nov. 23, 1955; Izu-Ôshima Isl., Dec. 12-14, 1953; Shimoda, Oct. 18, 1956.

オオバヤシヤブシ上の菌は関東南岸近辺のの自生地には、たいてい何処にでも一般に見られる。子囊殻は既知の *Phyll. Fraxinii* のものよりやや大きく 200~300 μ である。(Fig. VIII)

Literature

(1) Homma, Y.: *Erysiphaceae of Japan* (1937) — (2) Sawada, K. in Bull. Governm. Forest Experi. Stat. no. 50 (1951) — (3) Hirata, K. in Ann. Phyt. Soc. Jap. 21 (2-3) (1956).

Summary

In this report I noted ten species of the Erysiphaceae which were collected by me from the central part of Japan for the last 6 or 7 years. These species are distributed in 5 genera, and 7 hosts are newly added.

○*Pittosporum* の多子葉について (前川文夫) Fumio MAEKAWA: Polycotly in *Pittosporum tenuifolium*

双子葉類中の多子葉性は多くは畸形的に少数個体に現われるものが普通である。しかるところ、最近常習的(?)に多子葉であると思われるものを見出した。ニュージーランド産のトベラ属の一種 *Pittosporum tenuifolium* Gaertn. を昨年春播いたがほとんど発芽せずあきらめかけたところ、本年四月に急に6本が芽を出した。それがすべて多子葉であって、3枚子葉が3株、4枚が2株、5枚が1本であった。これだけ揃って畸形的になるということは考えられないから、この種類における多子葉性は恒常的のものであることはまず間違いなからう。そして古い性質であると共に New Zealand の産だということは大変興味をひくのである。